

「調べる」「指導における五つのポイント」

金沢大学教育学部教育実践総合センター助教授
中川 一史
なかがわ ひとし

国語科の学習の中には、情報教育の柱としていちばんウエイトが置かれる、情報活用の実践力にからむものが少なくない。情報活用の実践力とは、「課題や目的に応じて情報手段を適切に活用することを含めて、必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況をふまえて発信・伝達できる能力を育てる」ことであり、課題に適切に対応しながら「調べる」「まとめる」「伝え合う」力を育成することを意味する。

これは、例えば現行学習指導要領の小学校国語の目標「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。」に明記されている「伝え合う力を高める」とことと密接に関連する。

「伝え合う力」を高めるためには、学習場面において「調べる」活動をどれだけいいいに、時間をかけて行

えるかがポイントとなる。「調べる」という活動は、「辞書・文献などの図書資料を用いる」「テーマについて詳しい人に聞く（インタビュアー）」「インターネットを使う」など、多岐に渡っている。文献にあたるときは、必要な情報を得るために効果的な読み方を工夫すること、

インタビュアー場面では、インタビュアーする側の意図が分かるように、話の組み立てを工夫しながら目的や場に応じた適切な言葉遣いで話すこと、インターネットでは、聞きたいことの返事をもらえるように、自分の考えを効果的に書いたりすることが求められる。このことは、言うまでもなく、「読む」「話す・聞く」「書く」という国語科の内容そのものからむ部分である。

本稿では、六年上巻『学級討論会をしよう』（話して伝える活動）^①、『ガイドブックを作ろう』（紙面で伝える活動）^②の二つの教材を例に、「調べる」指導における五つのポイントを挙げてみたい。

1 情報源を広げる

高学年になれば、図書資料や新聞、インターネット、関係者へのインタビュアーなど、あらゆるものからの情報収集が可能になる。

教師は、「各自に応じた方法で資料や情報を収集するなどして、幅広く取材活動を行うよう助言する」（『学級討論会をしよう』学習指導書六上P142）わけだが、当然個人差があり、まだ情報源が限られている児童もいる。そこで、情報源が限られている児童には、新しい情報源について助言をしたり、グループ活動を取り入れたりする必要が出てくる。

「辞書や百科事典・図書資料」「アンケートやインタビュアー」「新聞や雑誌」「インターネット」など、いろいろな方法を示しながら、個に応じて他の情報源を提示したり、それらの情報を比較させたりするなどのアドバイスをしたい。特にインターネットでは、公的機関が公開しているものと個人が公開しているものが混在しているので、それを確認させることも必要である。

2 個に応じて取材させる

六年上巻『学級討論会をしよう』は、一つの問題を肯定・否定の両面から考えるために、肯定派・否定派の二つのグループに分かれて討論するという、「話すこと・聞くこと」の教材である。一部ダイアログにも通じる活動であるが、ここで大切なのは、それぞれの立場で論を組み立てることにある。そのためには、相手を説得するだけの根拠のある材料をどれだけ集められるかが、ポイントとなる。

調べ方にしても、きちんと根拠を挙げて、そこに自分の意見を載せられるかが重要であり、資料などに書いてあることと自分の考えが混在していないか、丸写しの域を出ていないのかを、教師はきちんと把握しておかなければならない。「どこかに書いてあったもの」と「自分の意見」を繰り返し指導しながら、「何を明らかにしたいのか」を確認していくことが必要になる。

3 論を立てるためのスモールステップをふむ

『学級討論会をしよう』では、肯定派・否定派に分かれての討論を行うが、この学習においては、限られた時間の中で、いかに人を納得させる論が展開できるかが重要になってくる。「論題を決める」「メリット・デメリットを整理して、道筋を見つける」「意見を組み立てるために資料収集する」「立論マップなどで論を組み立てる」「議論の流れを予測する」「原稿を書く」という学習活動が展開されるが、これらをていねいに指導するために、かなりの時間を確保したい。

また、インタビューで資料収集しようとする児童に対しては、アンケート項目案やインタビュー・シート（図参照）を作成させ、教師が目を通したり、互いにインタビューをする側とされる側になる練習の場を設けたりするとよい。

4 紙面で伝えるために特徴をつかませ、考えさせる

同じく六年上巻に、『ガイドブックを作る』という「書くこと」の単元がある。十一時間扱いで、いろいろなガイドブックを集めてその構成や材料の選び方の特徴をつかみ、実際に自分でガイドブックを作成するという構成になっている。

ガイドブックを実際に作るためには、見つけてきたガイドブックを見て、その特徴をつかむことが、まず求められる。「全体の構成はどのようなになっているか」「写真や図の使い方にどんな工夫が見られるか」などの特徴をつかませるとともに、「何を伝えたいガイドブックなのか、それはどこから伝わってきたかなどについて話し合わせる」「文章、画像（写真、カット、地図など）、色づかいの工夫についてワークシートに書かせる」「同じジャンルの他のガイドブックと比較して考えさせる」など、具体的な指導にまでふみこみたい。

5 紙面で伝えるために場を保证する

ガイドブックやパンフレット作りでは、相手意識とシチュエーションをしっかりと押さえておかないと、すべ

インタビュー・シート		() 班	
テーマ	おしゃべり	話し相手	
はじめ	一 あいさつ		
一 質問紹介			
三 質問の答え			
おわり	一 お礼		
二 今後の取り組み			

インタビュー・シート

ての活動があいまいになってしまつ。「この相手には、この写真や文章が通用するのか」という検討の場を保证すべきだし、教師側で適切な評価の観点をもっている必要がある。

さらに、実際に手にとってくれるのかどうか、リアクションを得る場の設定も必要だ。実生活においても、パンフレットなどは「手に取ってもらってなんぼ」の世界である。そのような状況は国語の時間だけで確保できないことも考えられるので、たとえば総合的な学習の時間との具体的な関連で、どのように授業をデザインできるかがポイントとなる。

ここに挙げた以外にも、情報教育の視点に立つたいくつかの実践事例の詳細については、学習指導書『情報活用能力を育てる実践事例集』メディアを活用した国語の授業』において具体的に示してあるので、ぜひ目を通していただきたい。